A4　A7

高校生を対象にした教育相談

文学部英語学英文学専修４回生　0100-22-3878　神田知美

私の希望する高等学校教員を希望するので、高校生を対象に、学校における教育相談について考える。

まず、生徒の問題に気づくためにどうするのか、についてである。ここでは具体例として、不登校の問題について取り上げる。近年の不登校の状況を見てみると、2013（平成23）年度の高等学校における不登校生徒数は５万６千人で、前年度よりも約６百人増加しており、さらに前年度はその前の年よりも約４千人増加していることから、不登校になる生徒が年々増加していることがわかる。これは、生徒の友達関係に対する考えの変化にあるのではないかと考える。ベネッセ教育研究開発センターの『高校データブック 2013』と『第二回子ども生活実態基本調査』によると、男子において、「日ごろよく話をしたり一緒に遊んだりする友だち」（11人以上）の比率は、2004年の26.2%から2009年には35.6%まで増加している。また、「悩みごとを相談できる友だち」（４人以上）の比率は35.1%から45.5%まで増加しており、「グループの仲間同士で固まっていたい」「仲間はずれにされないように話を合わせる」と回答した男子の比率も上昇している。女子の比率はここまで大きく変化していないので、このように友人関係に気をつかう男子高校生が増えていると言えるだろう。特に、「友だちといつも一緒にいたい」「グループの仲間同士で固まっていたい」「仲間はずれにされないように話を合わせる」と回答した男子の割合は女子よりも高くなっているので、ここ数年で男子の友達に依存する傾向が強まり、また生徒同士の凝集性が高まっていることも理解できる。また、生徒の社会観を調べた時には「いい友だちがいると幸せになれる」と回答したのが９割以上と高く、生徒が友だちとの関係を重視していることがわかる。これは逆に考えると、良い友達関係を築けなければ幸せになれない、ということを意味する。つまり、近年友人関係に気をつかい、それに依存する生徒が増加するにしたがって、その友人関係が少しでもうまくいかなくなったときに、学校に行けなくなるのではないだろうか。したがって、不登校という問題が生じる前に、教師は生徒の友人関係に目を配るべきである。誰と誰が親しいのか、どれくらいの規模のグループで行動しているのか、そのグループの性格はどのようなものなのか、それらを日ごろから観察しておく必要がある。私は６月に２週間母校の高校に教育実習に行って感じたことだが、高校教師は多忙のために中学校教師に比べると、生徒の素の部分に触れ合う機会が少ないように思う。担任しているクラスでも、直接生徒と会うのは担当授業とホームルーム、清掃の時間くらいで、それだけでは生徒同士の友人関係を把握するのは不可能である。生徒たちが友人と行動するのは休み時間や移動教室のとき、昼食の時間などであるので、その時間に生徒の様子を見に行けるようにしたい。たとえば教師は授業が始まる５分前には教室に入っておいて、授業の準備をするふりをしながら生徒の様子をうかがい、誰と誰が一緒に喋っているのか、などを見たり、職員室から教室に向かうときに生徒が移動教室していたら、

どのようなグループを作っているのか観察したり、時々昼食の様子をうかがうのも良いだろう。とにかく、日々の生徒の素の部分の観察を重視するべきである。

次に、そのような観察によって問題に気づいたときにどうするのか、について考える。たとえば、ある生徒がいつもはグループで行動しているのに一人でいたとする。とりあえず教師はその生徒に声をかけてやるのが良い。しかし、直球に問題について尋ねるのではなく、軽く「最近どう？」くらいの質問をして、その生徒に不必要な警戒心を抱かせないように注意しなければならない。そしてその生徒が学校を休んでしまったら、欠席が続かないようにこまめに連絡を入れて学校の様子を教えてあげたり、来てほしいと伝えたりして、その生徒に自分が他人から求められている、自分は見捨てられていない、という自己肯定感を持たせるようにすべきである。一方、その生徒が所属していたグループの仲間たちについても話を聞くべきである。しかし、その生徒がますます孤立してしまわないように、その友人たちを責めるようなことは言ってはならない。ここでも「最近、あの子どうしているか知らない?」とか、「今日は○○は一緒じゃないのか」というように尋ね方にも工夫が必要である。

最後に、そのような質問をすることによって、生徒から相談された時にどうするのか、ということを考察する。何よりもまず第一にすることは、その生徒の話をよく聞いてやることである。その際には本人が言うことを繰り返したり、相槌を打ったりすることで、教師がしっかり聞く姿勢を取り、できるだけ生徒から話を引き出せるようにしてやりたい。グループ内でもめているのであれば、その原因を一緒に考えたり、一緒に悩んだり、親身になってやることが重要である。このような問題に対する答えとして正解、というものは存在しないだろう。しかし、教師が生徒と一緒に考えてやることはできる。そして、教師の独りよがりにならずに、生徒がどのような解決方法を望んでいるのか把握することも大切であると思う。大事にすることを望んでいないのであれば、当事者同士で話し合えるような場を教師が用意してあげることができる。だが、この話し合いにも注意が必要だ。私の経験談だが、中学３年生の時、部活動で２つの女子のグループが練習態度に対する問題から険悪な雰囲気になった。顧問の先生が問題解決のためにその２つのグループを集めて、互いに話し合いをさせようとしたが、当事者の一部は現れることもせず、結局話し合いは決裂し、片方のグループは部活に来なくなってしまった。このときの話し合いがうまくいかなかったのは、本人たちの問題ももちろんあるが、顧問の先生と部員との人間関係がまだあまりできあがっていなかったからだろう。その先生は、転勤してきたばかりで、私たちはまだその先生に慣れていなかったこともあって、先生の指導に対して、自分たちの練習に口を挟まれた、というような反発心を感じていた。そのために、自分たちの問題に先生が介入してきたことに抵抗があったのである。したがって、生徒同士で話し合いをさせる前に、互いの生徒たちと教師が話し合いを重ねて、生徒との間に信頼関係を築いておかなければならない。もちろん、話し合いの場には教師も参加するが、生徒との間に信頼関係ができていれば、生徒も安心してその場に臨めるだろう。こうして、不登校になる前に

問題解決ができるのが理想であるが、万が一、生徒が不登校になってしまったときの対応はどうすべきか。もちろん、生徒と話をするのであるが、このとき注意するのは、電話で対応するのではなく、家庭を訪問して直接生徒の顔を見て話をする、ということである。このときに、保護者の話を聞くこともできるかもしれない。高校は、中学校に比べると校区が広くて、学校から遠く離れた場所に住んでいる生徒もいるかもしれない。しかし、その手間をかけてこそ、生徒の信頼が得られるのではないだろうか。あとの行動は前述したとおりだが、その生徒が学校に復帰するときの環境を整えてやることも大切である。ほかの生徒の何人かに少し気にかけてもらえるように頼んだり、ほかのクラスの先生方にもお願いして様子を見てもらったり、自分も積極的に声をかけたりと、自分一人で解決してしまわずに、周りの協力を得ながら、アフターケアをしていきたいと思う。(3,078 字)

【参考】

・調査・研究データ ・ ベネッセ教育総合研究所 ・Benesse 教育情報サイト
＜http://benesse.jp/berd/data/＞
・授業ハンドアウト「問題の理解と対応(1)不登校」(2012 年 5 月 21 日)